

小学校外国語科における「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想と学習評価についての一考察

“Foreign Language” Education at Elementary Schools in Japan:
Methods for Lesson Planning and Evaluation

学校支援課 指導主事 岡 久美子 OKA, Kumiko
学校支援課 指導主事 中 村 光 伸 NAKAMURA, Mitsunobu
研 修 課 指導主事 榎 本 三紀子 ENOMOTO, Mikiko

【要旨】 2020年度から全面実施となる小学校外国語科では、「読むこと」「書くこと」の導入が、これまでの外国語活動との大きな違いとなるとともに、より一層の校内研修の充実や小中連携が求められている。和歌山県教育センター学びの丘（以下、当センターと略記）では、これらの課題に対応するため、小中学校教員による研究会を発足させた。新学習指導要領対応小学校外国語教材“*We Can!*”（以下、*We Can!*と略記）を用い、「読むこと」「書くこと」を踏まえた単元構想と指導方法、そして学習評価について研究した内容を示す。さらに、小学校における取組や校内研修の充実をめざし、国語科とのつながりや指導のポイントについて述べる。以上の研究内容により、今後各校での実践が充実されることをめざす。

【キーワード】 「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想、学習評価、小中連携、新学習指導要領対応小学校外国語教材“*We Can!*”、小学校国語科との連携、小学校文化に根差した外国語教育、言語教育、カリキュラム・マネジメント、CAN-DO リストーふり返り

Abstract: The new Courses of Study for elementary schools, junior high schools, high schools and schools for special needs education were officially announced. The new education system in elementary school begins formally from April 2020. In foreign language (namely, English) education, from the perspective of "continuity of learning", we need to clarify the goals considering "what children will be able to do using foreign languages." "Foreign Language Activities" formerly taught from 5-6 grade in elementary school will now begin in 3-4 grade. The newly appointed subject "Foreign Language" will start in 5-6 grade. One of the big differences between "Activities" and "Subject" will be its inclusion of "Reading" and "Writing." In addition, smoother transition between each learning stages is necessarily required. Therefore, us, instructors will need to enhance a consistent English education and develop students' productive and receptive language skills by sharing our knowledge and teaching methods. To deal with those tasks, Wakayama Prefectural Educational Center Manabi-no-Oka formed a study group for "Foreign Language" Education at elementary schools. By working with group members, we propose the methods for lesson planning and evaluation which include the aspects of "Reading" and "Writing." Furthermore, in the aspect of language acquisition, we would like to point out the close relationships between foreign language education and Japanese education.

研究協力者

田辺市立芳養小学校	城戸 知樹	田辺市立新庄小学校	山崎 浩平
田辺市立新庄小学校	田村 展彬	田辺市立新庄第二小学校	中西 皓一郎
田辺市立中山路小学校	中山 恵美	田辺市立新庄中学校	小嶋 亜依
田辺市立衣笠中学校	田中 利依	田辺市立龍神中学校	井手 珠代
和歌山県外国語指導講師 Benjamin Stannard			
平成30年度和歌山県教育センター学びの丘研修員（海南市立巽小学校）松尾 竜典			

1 小学校外国語科導入に当たって

新しい外国語教育が始まる。学習指導要領改訂により、2020年より小学校第3、第4学年（中学年）で外国語活動が必修となり、第5、第6学年（高学年）では外国語が教科として実施される。

特に、小学校での外国語は誰も経験したことのない新しい教科であり、小学校文化に根差した指導が望まれるとともに、小学校中学年での外国語活動と中学校での外国語科の学習を繋ぐ役割を果たす重要な段階である。

(1) 小学校外国語科導入の背景

現在の子供たちが成人して社会で活躍する頃は、生産人口の減少や絶え間ない技術革新等により、予測が困難な時代を迎えていると予想されている。そのため、学校教育には、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」（※1）が求められている。

現行学習指導要領	新学習指導要領			
	小学校 第3学年及び第4学年 外国語活動	小学校 第5学年及び第6学年 外国語	中学校 外国語	高等学校 外国語
外国語活動	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらをつなげた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
知識及び技能	(1)外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	(1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	(1)外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	(1)外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの理解を深めるとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	(2)身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。
学びに向かう力、人間性等	(3)外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的、自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

図1 現行・新学習指導要領外国語活動・外国語における目標の比較（※下線及び枠囲いは筆者追記）

その上で、外国語科の導入の趣旨としては、グローバル化が急速に進展する中でのコミュニケーション能力の向上が課題となっており、小・中・高等学校での一貫した外国語教育の実施、指導の充実が求められている。また、平成 23 年度から必修化されている外国語活動の成果と課題として次の点が挙げられている。

小学校では、平成 23 年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。

また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている。(※2)

文部科学省小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック（以下、研修ガイドブックと略記）でも小学校外国語科について次のように述べられている。

小学校における外国語教育のこの新しい段階では、中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることが求められている。(※3)

これらの記述からも、小学校外国語科における「読むこと」「書くこと」を加えた 4 技能 5 領域を総合的に育成し、校種間を繋ぐ系統的な指導を行っていくことが求められていることが分かる。

(2) 新学習指導要領における目標

平成 29 年 3 月に改訂された新学習指導要領における目標はこれまでの課題を踏まえ、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、①各学校段階での学びを接続させる、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にする、という観点から改善・充実が図られている。また、平成 23 年度から必修化されている外国語活動の内容がほぼ引き継がれ、目標や内容が再整理されている(図 1)。さらに、これらの目標を踏まえ、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」「書くこと」の 5 つの領域別の目標も示され、これらの実現をめざした指導を通して、前述の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」における資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して「学びに向かう力、人間性等」を育成することが示されている(図 2)。

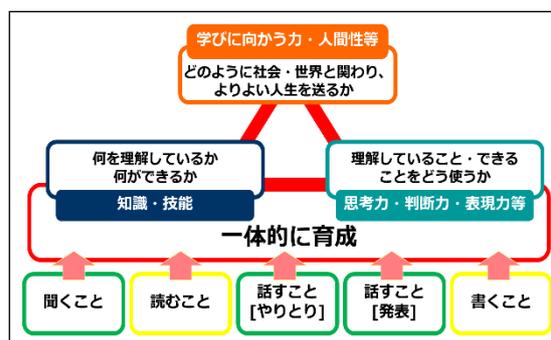


図 2 外国語教育における育成すべき資質・能力のイメージ図（育成すべき資質・能力の三つの柱を基に筆者作成）

(3) 小学校文化に根差した外国語教育

小学校学習指導要領総則には、「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。」(※4)とあり、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図り、言語能力を育成するとともに、各教科等の指導を通して育成をめざす資質・能力を身に付けることが求められている。

また、小学校学習指導要領・外国語の指導計画の作成上の配慮事項として、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他の教科等で児童が学習したこと

を活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること。」(※5)とあり、国語科をはじめとした学校における全ての教育活動と積極的に結びつけることが大切であるとしている。

とりわけ、同じ「言葉」を直接の学習対象とする国語教育と外国語教育においては、共通する指導内容や指導方法を扱う場面があり、それらを効果的に連携させることによって、相乗効果の中で言語能力の育成につなげていくことが重視されている。

国語教育と外国語教育において共通する指導内容や指導方法としては、例えば、国語科において日本語の作品を読む際に外国語の翻訳を参照したり、国語科において主語と述語との関係について学習したことを踏まえて、英語の語順に気付かせたり、関連のある学習内容や言語活動を取り上げた単元の設定を工夫したりすること等が考えられる。

各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の視点からも、「言葉」を学習する教科である国語科と外国語科との連携はもとより、言語活動を行う全ての教科等との連携が求められている。

小学校教員は、各教科や領域での学習内容や学校行事等、小学校教育課程に対する理解があり、児童の発達段階の特徴や傾向、児童一人一人の性格や興味・関心等、児童の実態に対する理解がある。よって、他教科等と外国語科を有機的に関連させ、小学校文化に根差した授業を行うことができる。小学校教員による外国語科の指導計画の作成と実施、学習指導の改善・充実を通して、国語科をはじめとした学校における全ての教育活動と積極的に結び付けた指導が可能となる。これにより、児童の知的好奇心がさらに刺激されるとともに、教科横断的な学習による学習効果の最大化が期待できる。

2 小学校外国語科授業研究会について

当センターでは、新学習指導要領全面実施に向け、小中連携を図りながら、小学校外国語科の効果的な指導方法について研究し、教員の指導力向上を図るとともに、外国語教育の充実に資することを目的として小学校外国語科授業研究会を発足した。

対象は、当センター近隣市町における同

中学校区内の小学校教員と中学校外国語科担当教員、及びその近隣地域の小中学校教員8名とした。小中学校教員を対象としたのは、新学習指導要領実施に向け、小中連携を図りながら、小学校外国語科の効果的な指導方法について研究を行うことをねらったためである。

研究内容は、「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想と、学習評価についてである(図3)。

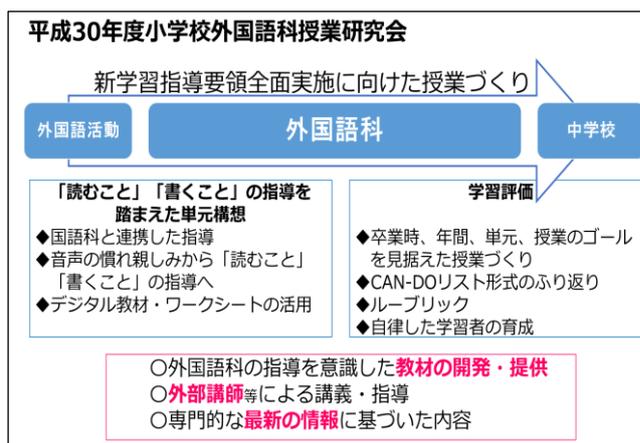


図3 小学校外国語科授業研究会 研究概要

「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想については、小学校教員にとっては、「読むこと」「書くこと」を外国語科で指導することは未知の分野であり、指導者の不安感が大きいのではないかと考え、取り上げることにした。また、学習評価については、これまで「慣れ親しみ」等に関し、外国語活動の記録として指導要録に文章で記述してきたところではあるが、教科化を迎えるに当たり、児童一人一人に学習指導要領の内容が確実に定着することを目標とするには、児童の学びを支援し、授業改善につながる学習評価の充実が求められるのではないかと考え、取り上げることにした。

実施回数は、年間6回であり、実施時期は図4のように設定した。

研究会での学びを単なる気付きやその場限りの学びに終わらせないために、所属校に還元する往還型モデルで研究会を実施した。具体的には、研究会における講義・演習で得たことを基に、各自が所属校で授業実践を行い、その実践等から、移行期間における成果や課題を共有し、全面実施に向けた取組を進めていった。

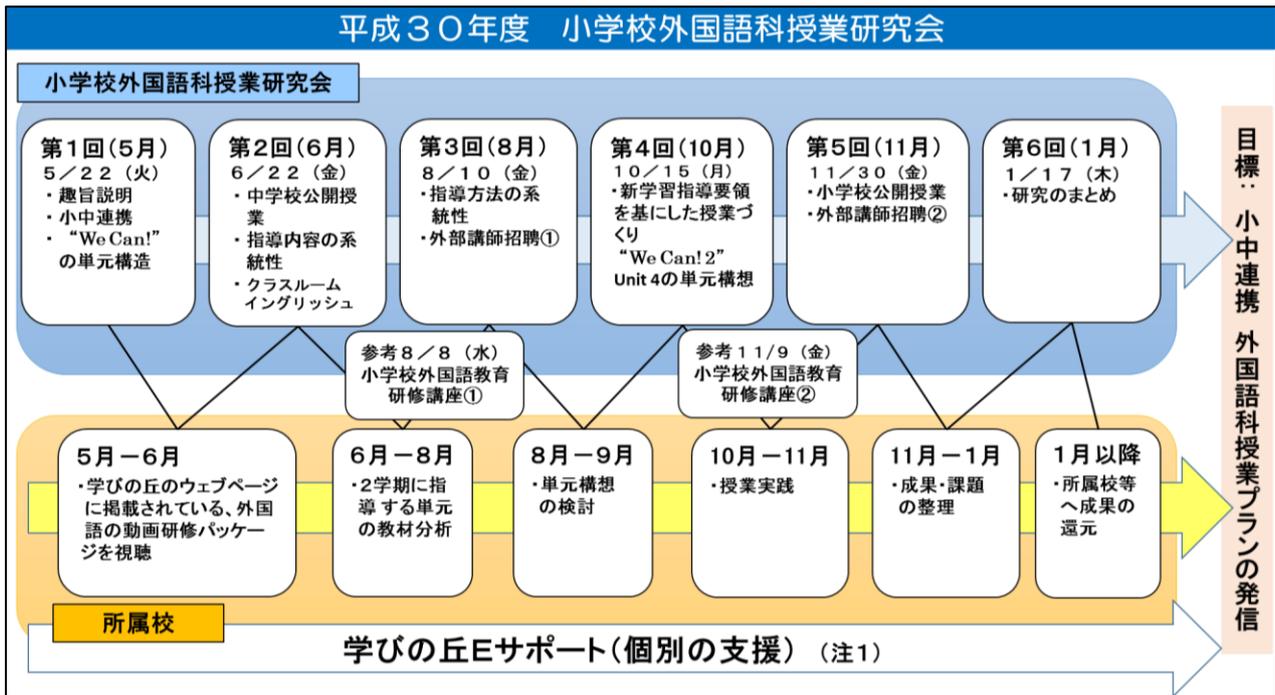


図4 小学校外国語科授業研究会 年間計画

(1) 「読むこと」と「書くこと」の指導を踏まえた単元構想

ア 「読むこと」と「書くこと」の学習
 今回の学習指導要領改訂で、新しく導入された「読むこと」と「書くこと」については、「中学年の外国語活動では指導しておらず、慣れ親しませることから指導する必要があり、『聞くこと』『話すこと』と同等の指導を求めるものではない」(※6)ことに留意する必要がある。

We Can!では、中学年外国語活動において、アルファベットの大文字・小文字に慣れ親しんだことを踏まえ、図5のような「読むこと」と「書くこと」の学習活動が設定されている。

この並びは指導の順ではなく、2年間で140単位時間(第5学年時70単位時間、第6学年時70単位時間)実施される授業において、毎回少しずつ行うことが提案されている。

なお、これらの学習活動は、We Can!において Sounds and Letters, Let's Read and Write, Let's Read and Watch, Story Time といった活動として設定されている。特に Sounds and Letters, Let's Read and Write は、基本的にほぼ毎時間、いわゆる「帯活動」として位置付けられており、付けたい力を身に付けさせるため、繰り返し取り組ませる必要がある。

- ・アルファベットの文字の認識・読み・書き
- ・アルファベットの文字には二種類の読み方があることを知る
- ・アルファベットの音に慣れ親しむ
- ・単語を聞いて初頭音が分かる
- ・単語の認識
- ・文中に単語カードを置く
- ・単語を書き写す
- ・語群から選んで書き写す
- ・友達の書いた清書を読む
- ・例文を参考に書く、清書する
- ・英文を読む(音声を真似て言う)
- ・英文を見ながらそれが読まれる音声を聞く
- ・絵本の読み聞かせを聞く

図5 We Can!における「読むこと」と「書くこと」の学習活動 (2019年1月号『初等教育資料』より)

具体的な指導方法については、We Can!教師用指導書や文部科学省が作成した学習指導案例に記載されている。本研究ではこれらを毎回模擬的に示し、より明確な指導のイメージを共有した上で実践できるようにした。図6に、We Can! 2 Unit 1 This is ME! 第4時における Sounds and Letters のスクリプトを示す。

イ We Can!の単元構成と各時間における授業展開

We Can! は、これまでの外国語活動での学習内容を踏まえつつ、単元前半は「聞くこと」「話すこと」から始め、語句や表現に音声で十分慣れ親しませた後、それらを単元後半に読んだり、書いたりする活動につなげていく構造となっている。研修ガイ

Sounds and Lettersの例

1. 発音練習 (ジェスチャーをつけながら)

b b baseball
b b birthday cake
b b banana
b b bear
b b blue
b b basketball
b b badminton
(2回練習)

文部科学省作成
We Can! 2 Unit 1-9 Sounds and Letters ワークシート

2. サウンド・テニスをする
Teacher: Please play with me! First you. (野球の絵を指さしながら。)
Student: Baseball.
Teacher: (絵を指しながら) Birthday
Student: Banana
Teacher: Bear
Student: Blue
Teacher: Basketball
Student: Badminton.
(サウンドテニスをもう一度繰り返す。)
Teacher: Yeah, good job!

先生と一緒に

やって見せる

ペアで

Get into pairs. 1 and 2.
Let's play sound tennis. Stand up. (先生は机間指導をする。)
Great! Let's do it one more time.

3. 書く練習
Let's write b.
(黒板に貼ってある4線の紙に、マジックでbを書いて見せる。)

Now, let's practice air writing!
(児童と向かい合わせに立ち、指でbを書いて見せる。先生は鏡文字となることに注意。)

Now, air writing in your book!
(ワークシートの4線上に、指でbを書かせる。)

Get your pencil! Let's do it 1 - 2!
(鉛筆で一斉に書かせる。)

Fantastic job! Finish.

図6 研究会で作成した Sounds and Letters の指導例 (スクリプト)

ドブックに具体的事例として取り上げられている We Can! 2 Unit5 My Summer Vacation を取り上げ、確認する。

表1は、Unit5の各時間の目標として取り上げられている領域を表したものである。これをみると、この単元における指導展開も、「話すこと」「聞くこと」の学習活動から始め、音声で十分慣れ親しませたあと、「読むこと」と「書くこと」の学習活動に取り組みさせる展開となっていることが分かる。

表1 Unit5の各時間の目標として取り上げられている領域と Let's Read and Write

時間	1	2	3	4	5	6	7	8
領域	S	L/S	S	S	S	L/S	S/R	W
Let's Read and Write	W①	W①④	W①④'	W②④'	W③④'		W①② ③④	W①② ③④

※Lは「聞くこと」、Sは「話すこと」、Rは「読むこと」、Wは「書くこと」の領域を示している。

単元末には、「夏休みの思い出を紹介する」という言語活動が設定されており、児童が話したり、書き写したりすることができる表現を次のように例示している。

- ① I went to the sea.
- ② I ate watermelons.
- ③ I enjoyed swimming.
- ④ It was fun.

また、単元末の言語活動で児童が無理なく読んだり、書いたりすることができるように、各時間に Let's Read and Write が帯活動として位置付けられている。Let's Read and Write は、「文を音声化したり、自己表現のために例文を見ながら書き写したりすること」(※7)を目的とした学習活動である。

「聞くこと」「話すこと」からスタートし、「読むこと」「書くこと」に取り組む順序性は、各時間における授業展開においても同様である。この単元の2時間目の学習展開を表2に示す。

これを見ると、「聞くこと」「話すこと」の学習活動から入り、語句や表現に十分慣れ親しませたあと、終末に「読むこと」「書くこと」の学習活動につなげる展開になっていることが分かる。太線で囲まれている学習活動が、この時間の主となる言語活動 Let's Talk である。授業の前半から「聞くこと」「話すこと」の活動を通して、語句や表現に十分慣れ親しませた上で、Let's Talkに取り組みさせる。この活動の後の Let's Read and Write では、次の2文を扱う。

- ① I went to (the sea).
- ④ It was (fun).

自分が伝えたい内容になるように ()内の語を変え、音声を聞いて繰り返し読んだ後、自分の思いを書き溜めておくようにする。

表2 Unit5 (2/8)の学習展開

時間	学習活動	
1分	あいさつ	
9分	Let's Play ポインティング・ゲーム①②	L
5分	Let's Watch & Think 1	L
5分	Let's Play フェイント・リポート・ゲーム	L
5分	Let's Chant Summer Vacation	S
5分	Let's Talk 夏休みに行った場所とその感想について	S/L
5分	Let's Read and Write	R/W
5分	Sounds and Letters	W
5分	ふり返り	

以上のように、We Can! では、児童が過度の負担を感じることなく、自分に関する簡単な事柄について目的をもって読んだり書いたりすることができるように、単元及び各時間において、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の順序性を踏まえた学習展開となっている。本研究会における「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想も、文部科学省が作成した学習指導案例を参考に、この順序性を踏まえた上で、本研究会に所属する各小学校高学年の外国語活動担当教員が作成した。

ウ 言語活動の充実

小学校外国語科では、言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することが求められている。

研修ガイドブックでは、言語活動について次のように述べられている。

外国語活動や外国語科においては、言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。したがって、外国語活動や外国語科で扱われる活動がすべて言語活動かというところではない。(中略) 実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うという言語活動の中では、情報を整理しながら考えなどを形成するといった「思考力、判断力、表現力等」が活用されると同時に、英語に関する「知識及び技能」が活用される。(※8)

また、小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編では、言語活動を行うに当たり次のことが書かれている。

言語活動を行う際は、単に繰り返し活動を行うのではなく、児童が言語活動の目的や言語の使用場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。(※9)

以上のことを踏まえ、本研究会では、単元末に児童が外国語を使って何ができるようになればよいのかを明らかにし、そこから遡って1時間ごとの目標を定め、単元を構想していくことを提案した。この、パッ

クワード・デザインによる単元構想を行うためには、まず、指導者自身が単元末でめざす児童の具体的な姿(単元を通して児童に身に付けさせたい力)をイメージすることが必要である。これにより、目標の実現に向けて必要な練習や言語活動といった手立てが見えてくる。

単元末における言語活動は、それまでの学習で身に付けた知識やスキルを使いこなすことを求めるパフォーマンス課題と捉えられる。西岡(2012)によると、パフォーマンス課題を作成する際には、次の6つの要素(GRASPS)を課題に盛り込むことがよいとされている。

- ①GOAL (目的があるか)
- ②ROLE (役割があるか)
- ③AUDIENCE (相手があるか)
- ④SITUATION (状況の設定があるか)
- ⑤PERFORMANCE (完成作品は何か)
- ⑥STANDARDS (観点を設定しているか)

このような視点を持ち、We Can!に設定されている単元末の言語活動を基に、児童が関心意欲をもって取り組めるような言語活動を設定する。

本研究会に係る授業公開では、We Can! 2 Unit4 I like my town.に設定されている「町のミニポスターを作ろう。」という言語活動を、次のように工夫した。

今回は、単元の後半に⑤ミニポスターを作成して、それを発表するが、それらを行う必然性を設定する上で、③田辺市のCIR(国際交流員)の方にご協力をお願いした。アメリカの出身地について、ミニポスターを使って紹介する動画を撮影してもらい、第1時でそれを見る。そして、④自分たちのために紹介をしてくれたお礼に、今度は②自分たちの地域について紹介する①動画を撮影して送るという最終的な目的をもって学習を進めていく。また、撮影する前には、お互いに発表し合って「よりよい動画にするためにはどうしたらよいのか」を話し合う場を設ける。

(公開授業の学習指導案より抜粋)

※文中の番号は上述のGRASPSに対応

GRASPSの視点で見ると①～⑤が明確に示されている。単元末の言語活動における

パフォーマンスを評価するためには、評価の観点と評価規準を併せて考える必要がある。それらを児童と共有することは、児童自身がどのような力を身に付けるべきかが分かるため、有効であると考えられる。このことについては、次項で述べる。

(2) 学習評価

ア 自律した学習者の育成

小・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編及び高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説総則編では、学習評価の実施に当たっての配慮事項として、以下のように記述されている。

児童（生徒）のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科（・科目）等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。（※10）

※（ ）内は中・高等学校

以上のことから、学習評価においては、①児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすること、②教員が学習の過程や成果を評価し、指導の改善に生かすようにすることの2点が、重視されることが分かる。特に①は、児童生徒にとって、自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようになるためにも、充実を図る必要がある。

また、研修ガイドブックでは、小学校外国語教育の評価について、以下のように記述されている。

「主体的に学習に取り組む態度」については、子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。（※11）

中央教育審議会（平成 28 年 12 月）がとり

まとめた「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」によると、新学習指導要領の評価の観点は、育成したい資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に対応させて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理されている。この「主体的に学習に取り組む態度」の育成を通して、児童が学ぶことに興味関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができるようになる。このような、自分で自分の学習を進める自律した学習者を育成することは、生涯学習の観点からも有効である。

グローバル化が急速に進展する現代では、外国語によるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種に限るものではなく、生涯にわたる様々な場面において必要となることが想定されている。自律した学習者としての態度や姿勢が身に付くと、学校を卒業した後も、自らに必要な言語能力の習得を続けることがより容易になると考えられる。小学校で新しい外国語教育の幕開けを迎え、生涯にわたりコミュニケーション能力の向上をめざすためにも、自律した学習者の育成を図る必要がある。

イ 「CAN-DO リストーふり返り」の作成

研究会で小中学校の教員が協働して授業づくりを行うに当たり、学習評価の充実と自律した学習者の育成を図る一方策として、「CAN-DO リストーふり返り」（図7、資料として添付）を作成した。

本シートは、文部科学省が“Hi, friends!”の補助教材として作成した“Hi, friends! Plus”（注2）内にある「CAN-DO リストーふり返り」を参考にした。また、CAN-DO リスト形式（注3）でのふり返りシートとして、単元に関して、児童が自分でどのようなことができるようになったかを確認するために活用することとした。本シートにある円の色を5色に分け、それぞれに5つの領域を表すイラストを付けることで、「聞くこと」「話すこと[やりとり]」「話すこと[発表]」「読むこと」「書くこと」別に何ができるようになるかを示した。



図7 小学校外国語科授業研究会作成「CAN-DO リストーふり返り」

本単元（全8時間）の8時間目に当たるふり返りを取り上げてみる（図8）。



図8 小学校外国語科授業研究会作成「CAN-DO リストーふり返り」第8時

図中にある「□8」は、本単元で何時間目に当たるのかを示している。各時間の記述文については、文部科学省が作成した学習指導事例にある各時間の目標や評価の観点を基に、各時間の展開から学習活動を具体的にイメージした上で、児童に分かりやすい表現に修正した。3つの☆印は、児童が言語を用いてどのようなことができるようになったかを、習熟度別に表せるようにした。

「CAN-DO リストーふり返り」を活用する際には、以下の4つを留意点とした。

- ①「CAN-DO リストーふり返り」は、単元のはじめに児童と共有し、見通しをもたせる。

- ②各時間の終わりに、普段使われているふり返りシートとともに活用する。
- ③児童が「できた」と思ったら☆印に色をぬるようにする。
- ④単元の途中でできるようになったことについても、随時☆印に色をぬるようにする。

特に④については、単元内で学習内容を繰り返し指導し定着を図ることで、児童のできることが徐々に増え、自己肯定感や達成感による学習意欲の向上につながるようにした。また、逆にできなかった場合でも、それに対して教員が適切な助言を行い、励ますことで学習意欲の低下を防止することをねらいとしている。

(3) 研究をふり返って

ア 「読むこと」「書くこと」の指導を踏まえた単元構想

本研究会に係る公開授業を実施した小学校第6学年（46名）を対象に、外国語の授業でできるようになったことについて、領域別にアンケート調査を行った（図9）。

読むこと①「アルファベットを発音することがアルファベットを発音することができる。」、読むこと②「学習した単語や表現を読んで、理解することができる。」という項目については、約8割以上の児童が「当てはまる」、「どちらかと言えば、当てはまる」の肯定的な回答をしている。

さらに、書くこと①「アルファベットを大文字や小文字で書くことができる。」、書くこと②「学習した単語や表現を書き出すことができる。」という項目についても、約8割以上の児童が「当てはまる」、「どちらかと言えば、当てはまる」の肯定的な回答をしている。

これらのことから、「読むこと」「書くこと」を踏まえた単元構想を通して、音声で十分慣れ親しんだ語句や表現を読んだり書いたりすることにつなげる指導や、単元を通じて少しずつ読んだり書いたりする指導により、児童が「できるようになった。」と実感できる指導となったことが分かる。

また、本研究会に所属する小学校高学年の外国語活動担当教員によると、移行期間における児童の様子として、「前年度と比較すると、単元を通して児童に身に付いた力が大きい。」（授業時数は、全面实施と

同様に年間 70 時間) , 「これまでの外国語活動よりも, 児童に力が付いてきていると感じる。」(授業時数は, 移行措置分の 15 時間を加えた年間 50 時間) といったことが挙げられた。

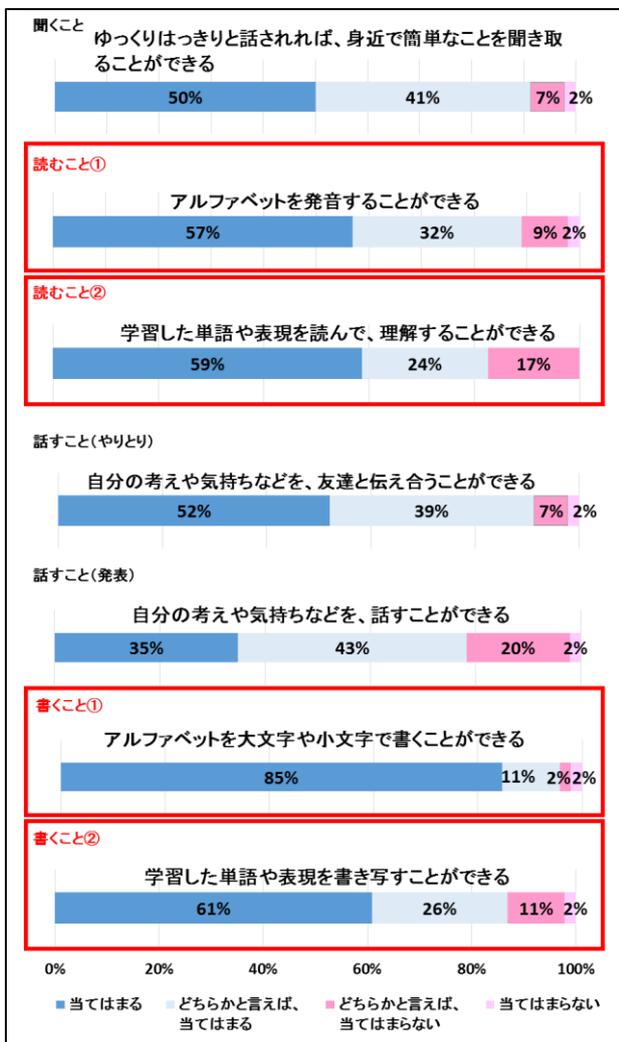


図9 児童アンケート結果「外国語の授業でできるようになったこと」

このことから、本研究会で取り組んだ「読むこと」「書くこと」を踏まえた単元構想は、外国語活動の教科化を迎えるに当たり、学習指導要領の内容を確実に定着させるための一方策として有効であると考えられる。

イ 学習評価

本研究会に係る公開授業を実施した小学校第6学年(46名)を対象に、「CAN-DO リスト-ふり返り」に係る事後アンケート調査を行った(図10)。

「ふり返りシートは、あなたの学習にとって役に立ったと思いますか。」という項

目について、約8割の児童が「当てはまる」、「どちらかと言えば、当てはまる」の肯定的な回答をしている。

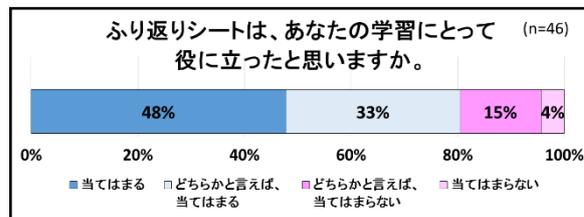


図10 「CAN-DO リスト-ふり返り」に係る事後アンケート調査

また、「当てはまる」、「どちらかと言えば、当てはまる」と回答した児童を対象に、「CAN-DO リスト-ふり返り」のどこなところが役に立ったかについて、記述により回答を得た(図11)。

- ・ もう一度、学習をふり返ることができる。
- ・ できたことと、できなかったことが分かる。
- ・ 自分で何が足りないかが分かり、次の目標が考えられる。
- ・ どんなことができたのか確認できるし、CAN-DO リストでふり返ることが楽しかった。
- ・ 学習するごとに、自分の変化が分かる。
- ・ 自分から積極的に取り組もうと思える。
- ・ ふり返りシートを通じて、先生に質問をして授業の内容をより理解することができる。

図11 「CAN-DO リスト-ふり返り」に係る記述による事後アンケート調査の一部

記述から、児童が「～ができるようになった」という達成感を得て、学習活動としてのふり返りを行うとともに、できなかったことについても認識し、次時につなげるためのふり返りができていたことが分かる。また、児童が、自分で自分の学習をどのように進めていくかを決めようとする行動もうかがえ、自律した学習者の育成が図れたのではないかと考える。

さらに、「CAN-DO リスト-ふり返り」の実践に関して、授業者への聞き取りを行ったところ、「様々な学習内容について、単元を通してふり返ることができた。」「児童が前向きに授業に取り組めた。」「児童が、習熟度を表す☆印に色をぬることを楽しみにしながら、学習を進めることができた。」など、多くの成果が聞かれた。

一方、課題としては、CAN-DO リスト形式でのふり返りを各時間に設定しているため、作成に時間を要すること、学習内容が

「CAN-DO リストーふり返り」に書かれてあることで、学習の順番を入れ替えるなど、柔軟な対応ができないこと等が挙げられ、今後への示唆が得られた。

3 小学校における「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携

(1) 国語科との連携の具体的なイメージ

図12は、教育課程部会（平成28年3月3日）において言語能力の向上に関する特別チームが示した資料である。国語科と外国語科の学習内容（音声、文字の表記・語句、文や文章の構成、4技能のゴールの4項目）を、小学校低・中・高学年の段階別に示し、関連付け、指導内容や指導方法等の連携の必要性を示している。同年8月26日に報告された「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」では、「『言語能力を育成する資質・能力』には、どの言語を運用する時にも必要な要素（両教科等において共通に育成するもの）とそれぞれの言語を運用する上で必要な要素（それぞれの教科において当該言語固有の特徴として育成するもの）」（※13、丸括弧内は筆者追記）があると述べられている。言語活動においても、次のような記述があり、言語活動で扱う種類の例が挙げられている。

例えば、文章表現（短文づくり、パラグラフ・ライティング、小論文）、発表（スピーチ、プレゼンテーション等）、議論・討論（ディベート、ディスカッション等）、交渉など、当該単元で育成する資質・能力を踏まえた言語活動を選び、両教科等において同じ種類の言語活動を扱うことで、共通する資質・能力を育成すること。（※14）

この項では、共通する資質・能力の育成に向け、We Can! 2の教材を取り上げ、小学校国語科等の教材を関連付けながら、主に「国語科」と「外国語活動・外国語科」の連携について考える。

We Can! 2 Unit 4 I like my town.では、単元末に「町のミニポスターを作ろう。」という言語活動が設定されている。テキストに示されているミニポスターは、タイトル、5つの文、3つの絵で構成されている（図13）。

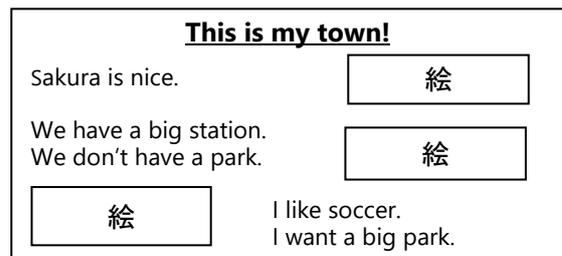


図13 We Can! 2 Unit 4 で示されているポスター

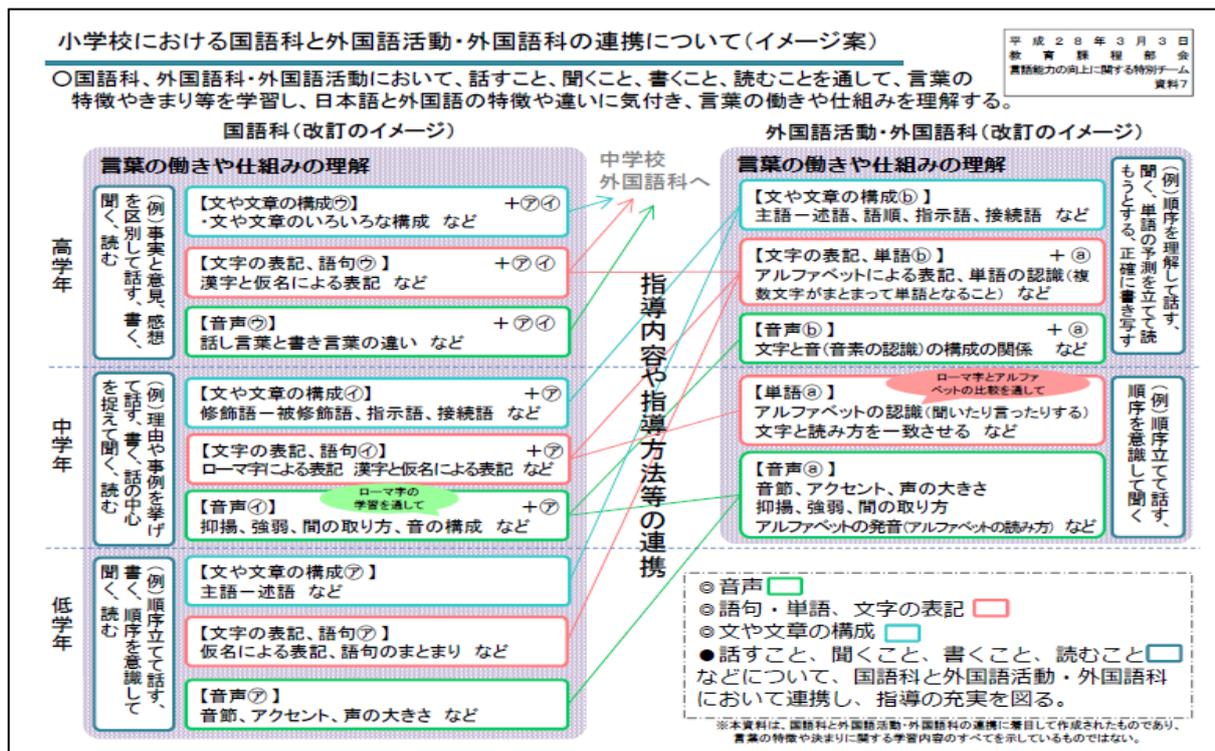


図12 小学校における国語科と外国語活動・外国語科の連携について（※12）

ここに書かれている5つの文は、3つの絵と連動していて、はじめ(1文)、なか(2文)、おわり(2文)の構成になっている。絵を使って説明するという説明の仕方については、児童は、本研究会実施地方で使用する第2学年国語科教科書(光村図書)の「おもちゃの作り方」の中で、分かりやすく説明するための工夫の1つとして学習している。はじめ、なか、おわりの3部構成で意見や考えを述べるという学習は、第3学年国語科(光村図書)の「こまを楽しむ」で学習している。町をポスターで紹介するという言語活動自体も、第6学年国語科(光村図書)の「ようこそ、私たちの町へ」という教材を通して、町のよさを伝えるパンフレットを作るという学習経験をしている。

このように、外国語活動・外国語科における言語活動を国語科と関連付けてイメージできるのは、国語科と外国語活動・外国語科の指導内容の系統性や関連性、使用する題材や言語活動の種類等について理解している小学校教員だからこそである。

言語活動で扱う題材についても、当該地方で使用する第2学年生活科教科書(啓林館)の「レッツゴー町たんけん」で自分たちの住む町の様子について学習している。

各教科等での学習内容といった、小学校教育課程に対する理解がある小学校教員だからこそ、外国語活動・外国語科と他教科等における学習内容を十分に意識し、言語能力の向上の観点からのカリキュラム・マ

ネジメントを実現することができると思える。

(2) 言語活動から見られる連携

国語科及び外国語科においては、言語活動を通して、それぞれに求められている資質・能力を育成することをめざしている。

(表3)

この項では、言語活動における児童生徒のゴールの姿に焦点を当て、国語教育と外国語教育の連携について考える。

表4は、小学校第1学年国語科、小学校第6学年外国語科、中学校第1学年外国語科それぞれの学年末に設定されている言語活動と、そのゴールの姿等を整理し、比較している。

共通するところは、言語活動の課題として学校生活の思い出を扱っていることである。また、それぞれに示されている文例の構成もよく似ている。

違いは、言語活動におけるゴールの姿(文例)において、小学校第1学年は母語(日本語)で書く、小学校第6学年は文章の一部を選んで英語で書き写す、中学校第1学年は全文を英語で書くということである。

小学校外国語活動・外国語科の言語活動で扱う内容は、小学校国語科に置き換えると「書くこと」の領域においては小学校低学年での学習活動レベルであるといえる。

母語である国語教育と外国語である英語教育の連携について、直山(2019)は、「国

表3 「小学校国語」「小学校外国語」の目標 (※下線筆者)

小学校国語	小学校外国語
<p>言葉による見方・考え方を働かせ、<u>言語活動を通して</u>、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1)日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。</p> <p>(2)日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。</p> <p>(3)言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。</p>	<p>外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと<u>の言語活動を通して</u>、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。</p> <p>(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。</p>

表4 小学校国語科、外国語科と中学校外国語科の言語活動におけるゴールの比較

	小学校国語科 1年生	小学校6年生	中学校 1年生
出版社 教材名等	光村図書 こくご一下 いいこといっぱい、一年生 「おもい出してかこう」	文部科学省 新学習指導要領対応小学校外国語教材 WeCan! 2 Unit 7 My Best Memory	東京書籍 NEW HORIZON 1 Presentation 3 思い出の行事
言語活動の 課題	一年生になってから、いっぱいいいことが ありましたね。しゃしんを見ておもい出し たり、まわりの人にきいたりして、どん ないいことがあったかをかきましょう。	思い出のアルバムを作ろう。	Unit11 までに学んだことを使 って、3文以上で思い出の行 事について発表しよう。
ゴールの姿 (文例)	がんばった玉入れ ぼくは、うんどうかいで、玉入れをがん ばりました。 れんしゅうのときに、先生が、「玉をひ ろったら、かごのちかくに置いてなげると いいですよ。」と、おしえてくれました。 うんどうかいでは、ぼくたち赤ぐみがか ちました。らいねんもかてるといいとおも います。 (教科書に掲載)	My best memory is my (school trip). We went to (the mountains). We enjoyed (hiking). It was (fun). ※()内を選んで書き写す。 (We Can!指導編に掲載)	We had our sports day in June. I can run fast. So I ran in the relay. Our team won first place. I enjoyed the day very much. (教科書に掲載)
文例の構成	三段落で構成 第1段落：したこと(思い出) 第2段落：言われたこと 第3段落：思ったこと	4文で構成 1文目：一番の思い出 2文目：したこと 3-4文目：思ったこと	5文で構成 1文目：思い出の行事 2-4文目：したこと 5文目：思ったこと

語教育で行っていることを、外国語教育が後追いする形がよいと思っています。(中略)国語教育で行っている言語活動が先にあり、それを外国語教育でもする。」(※15)と述べている。母語である日本語によって言語活動ができるからこそ、外国語である英語となってもできるということである。

小学校国語科では、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育成するために、第1学年の段階から言語活動を通して系統的な指導が行われている。小学校外国語科では、第3学年からの外国語活動による指導を踏まえ、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成するために、第5学年から言語活動を通して系統的な指導が行われる。これは、前述の「国語教育で行っていることを、外国語教育が後追いする」という直山の指摘と合致しており、表4に整理した言語活動の比較にも表れている。

大津(2017)は「国語の先生は日本語についてはよく承知しているが、英語についてはほとんど知らない。英語の先生は英語についてはよく承知しているが、日本語についてはほとんど知らない、という状況を変える必要がある」(※16)と述べている。

小学校教員は、国語科を指導しており、平成23年度からは外国語活動も指導している。つまり両方についてよく理解している

ということである。双方に共通する指導内容や指導方法を扱うことで、効果的な指導をすることができる。そう考えると、外国語科の指導に対し教員が抱く不安が和らぐのではないかと考える。また、小学校国語科の指導内容や指導方法を外国語活動・外国語科のそれらと繋げて考えられると、校内研修にも全ての教員が主体的に参加でき、指導方法等の改善に向けた協議を学校全体で活発に行えるのではないかと考える。

4 今後に向けて

本稿では、小学校外国語科導入に当たり、小中学校教員による研究会の取組を通して、「読むこと」「書くこと」を踏まえた単元構想と学習評価について研究した内容を示した。

「読むこと」「書くこと」を踏まえた単元構想については、「話すこと」「聞くこと」の学習活動から始め、音声で十分慣れ親しませたあと、「読むこと」「書くこと」の学習活動に取り組みせる順序となっていることを確認した。この順序性を踏まえた単元構想により、児童が過度の負担を感じることなく、単元を通じて少しずつ読んだり書いたりできるようになった。

学習評価については、児童が自らの学習をふり返って次の学習に向かうための一方

策として、「CAN-DO リストーふり返り」を作成し、活用した。これにより、児童が自分で学習をどのように進めていくかを決めようとする行動等がうかがえ、自律した学習者の育成を図ることができた。

以上の研究に加え、小学校におけるより一層の校内研修の充実に向け、前項では小学校国語科と外国語活動・外国語科の繋がりを示した。

今後は、小・中・高等学校を通じてコミュニケーションを図る資質・能力を育成するため、これまで以上に学びの連続性を意識し、一体感をもって、各学校段階における取組を進めていく必要がある。

小中連携の具体的な取組内容として、文部科学省が行った平成 29 年度英語教育実施状況調査（中学校）では、①情報交換、②交流、③小中連携したカリキュラムの作成が例として挙げられ、取組状況は図 14 のとおりである。（注 4）

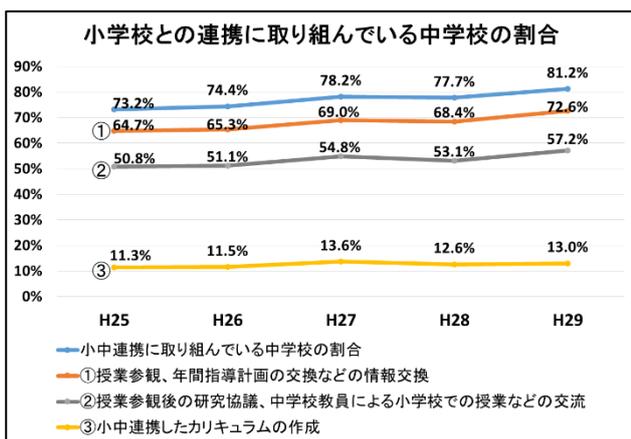


図 14 平成 29 年度英語教育実施状況調査
小中連携の状況

直山(2013)は、先の①、②、③について以下のように説明している。

①情報交換

小学校外国語活動でどのような取組を行っているのか、中学校英語科でどのような取組を行っているのかを、小学校教員と中学校英語担当教員とが知り合うこと。

例：授業参観、小中合同研修会等

②交流

同じ時と場とを共有し、何かを創り出すこと。

例：授業参観後の研究協議等

③小中連携したカリキュラムの作成

「目標の一貫性」「指導法の継続性」「学習内容の継続性」の三要素を重視したカリキュラム作成のこと。特に入門期において

は「指導法の継続性」を重視している。

例：外国語活動で児童が経験した活動を中学校で行うこと等

本研究会においては、これら 3 点を参考に、小中学校教員が、①授業公開や年間指導計画の交換等を通して、互いの取組・実践を情報交換したり、②単元構想の検討や公開授業後の研究協議を通して、指導方法について意見を交流したり、③小学校と中学校第 1 学年の指導から、学習内容や指導方法の継続性を確認し、指導に生かすようにした。このことにより、情報交換から交流へ、そして連携へとつながり、各学校段階間の学びの連続性を意識した指導の充実が図られたとともに、各学校段階における授業改善につながったのではないかと考える。

今後も、当センターの学校支援事業を始めとした様々な場面で、各学校段階間の学びの連続性を意識した授業改善への支援と、外国語教育の充実に向けて施策を行っていききたい。

謝辞：本研究の実施に当たり、多大な御理解・御協力をいただきました田辺市教育委員会の皆様には、この場をお借りして感謝申し上げます。

<注 釈>

注 1 学びの丘 E サポートとは、学校や市町村教育委員会等からの要請により、校内研修や研修会等において、講義・演習等を行う支援の総称である。「E」は、Encourage（励ます、勇気づける）の頭文字である。

注 2 “Hi, friends! Plus”は、研究開発学校のカリキュラムを補助し活用されることで、新学習指導要領移行期に各学校において活用する新たな教材開発に生かすために作成されたものである。

注 3 CAN-DO リスト形式とは、学習した後に、言語を使って何ができるようになるかを、「～することができる」の形で表したものである。本研究会では、ふり返りシートとして児童がどのようなことができるようになったかを確認するため、「～することができた」の形で表している。

注 4 本調査項目については、接続する小学校と確認した上で、回答することとなっている。

<引用文献>

※1 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編』東洋館出版社 p.1（2018）

- ※2 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂 p.63（2018）
- ※3 文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」p.12（2017）
- ※4 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』p.22（2018）
- ※5 同上資料 p.159（2018）
- ※6 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂 p.70（2018）
- ※7 文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」p.64（2017）
- ※8 同上資料 p.23（2017）
- ※9 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂 p.101（2018）
- ※10 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編』東洋館出版社 p.93（2018）
文部科学省「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編」東山書房 p.91（2018）
文部科学省「高等学校学習指導要領解説総則編」p.130（2018）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_01.pdf
- ※11 文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」p.27（2017）
- ※12 文部科学省 教育課程部会 言語能力の向上に関する特別チーム（第4回）配付資料 資料 7（2016）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryu/_icsFiles/afieldfile/2016/03/07/1367879_5.pdf
- ※13 文部科学省 教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」p.14（2016）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf
- ※14 同上資料 p.16（2016）
- ※15 文部科学省『初等教育資料 2019 年 1 月号』東洋館出版社 p.43（2019）
- ※16 日本学術協力財団『学術の動向 2017 年 11 月号』p.102（2017）
- ・ 光村図書『国語二下 赤とんぼ』（2015）
- ・ 光村図書『国語三上 わかば』（2015）
- ・ 光村図書『国語六 創造』（2015）
- ・ 萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生『改訂 小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ 40 のヒント』開隆堂（2015）
- ・ 文部科学省 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- ・ 金森強・本多敏幸・泉恵美子 編著『主体的な学びをめざす小学校英語教育－教科化からの新しい展開－』教育出版（2017）
- ・ 菅正隆 編著『平成 29 年改訂小学校教育課程実践講座外国語活動・外国語』ぎょうせい（2017）
- ・ 第 14 回全国小学校英語活動実践研究大会札幌大会実行委員会「第 14 回全国小学校英語活動実践研究大会札幌大会報告集」（2017）
- ・ 東京書籍『NEW HORIZON English Course 1』（2017）
- ・ 樋口忠彦・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子 編著『新編 小学校英語教育法入門』研究社（2017）
- ・ 光村図書『小学校国語教育相談室 no 9 1』（2017）
- ・ 光村図書『小学校国語教育相談室 no 9 2』（2017）
- ・ 文部科学省「新しい学習指導要領の考え方－中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ－」（2017）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- ・ 文部科学省『新学習指導要領対応小学校外国語教材 We Can! 1, 2』（2017）
- ・ 文部科学省『新学習指導要領対応小学校外国語教材 We Can! 1, 2 指導編』（2017）
- ・ 吉田研作 編『小学校英語教科化への対応と実践プラン』教育開発研究所（2017）
- ・ 酒井英樹・廣森友人・吉田達弘 編著『「学ぶ・教える・考える」ための実践的英語科教育法』大修館書店（2018）
- ・ 光村図書『小学校国語教育相談室 no 9 3』（2018）
- ・ 光村図書『小学校国語教育相談室 no 9 4』（2018）
- ・ 光村図書『小学校国語教育相談室 no 9 5』（2018）
- ・ 文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（2019）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2019/01/23/1412838_1_1.pdf
- <参考文献>
- ・ 森山卓郎 編著『国語からはじめる外国語活動』慶應義塾大学出版会（2009）
- ・ G.ウギンズ&J.マクタイ著、西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計－「逆引き設計」の理論と方法』日本標準（2012）
- ・ 文部科学省初等中等教育局「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」（2013）
- ・ 啓林館『いきいきせいかつ下』（2015）
- ・ 光村図書『国語一下 ともだち』（2015）

Unit 4 I like my town. CAN-DOリスト - ふり返り



Grade _____ Class _____ Name _____

聞く: 読む: やりとり: 発表: 書く:

□1 町にあるもの、ないものが分かった。



□2 自分の町にある施設、ない施設について、友達と伝え合うことができた。



□2 We have (a park). など、自分の町にある施設を書き写せた。



□2 4線上に1の文字を書くことができた。



□3 地域のよさとその理由が分かった。



□3 自分の町のよさとその理由を、友達と伝え合うことができた。



□3 We don't have (a library). など、自分の町にない施設を書き写せた。



□4 登場人物のほしい施設が分かった。



□4 自分の町に施設があるかないかについて、友達と伝え合うことができた。



□4 ほしい施設とその理由を友達と伝え合うことができた。



□4 4線上にmの文字を書くことができた。



□5 町紹介の発表について、どんな感想が分かった。



□5 自分の町の名前を英語で書いた。



□5 I want a (nice library). など、自分の町にほしい施設を書き写せた。



□5 町について書かれているミニポスターの英文を声に出して読めた。



□6 町を紹介するミニポスターを作ることができた。



- ・相手に伝わるようにていねいな字で。
- ・単語と単語の間をあけて。

□6 4線上にnの文字を書くことができた。



□7 ミニポスターを発表することができた。



- ・ジェスチャーを交えて。
- ・聞き手の反応を確かめながら。 など。

□8 友達の作ったミニポスターを読んで、内容を理解することができた。



□8 短い絵本の話聞いた後、自分でその絵本を読むことができた。



単元のふり返り「自分のできるようになったこと」「これからの課題」「感想」などを書こう